

気仙沼立気仙沼中学校

校長名：齋藤 一 学級数：11 生徒数：310 教職員数：28

1 東日本大震災発生直後の状況

平成23年3月11日14時46分、宮城県沖を震源とするM9.0震度6弱の地震が発生。卒業式前日で校舎には会場準備をしていた2年生全員と1年生約半数の160名ほどが残っていた。緊急放送で生徒を校庭に避難させた。停電のためラジオから情報を得た。避難する車がどんどん校庭に入ってきた。

大津波の襲来がわかり、生徒には津波を見せないよう校庭中央に集め、コー



ンで区画して安全を確保した。小雪がちらつきとても寒かったが、余震が続いている状況だったので校庭待機とした。

16時30分、暗くなり寒さも我慢の限界に近づいたので、避難してきた生徒も含め191名を1階の3部屋に入れ、反射式ストーブで暖をとった。避難者が続々詰めかけ、濡れた避難者もいたので体育館を避難所として開放し土足可とした。

17時、校長室に全職員を集め、被害の状況、生徒の様子、避難者の様子を確認した。明かりはろうそくで、水は節水を、トイレの使用も張り紙で注意した。各場所に職員を配置し、携帯が使えないので2時間後に校長室（校内災害対策本部）に集まるよう指示した。状況の報告と情報収集のため職員2名を教育委員会に派遣した。以降、2時間ごとに集合し情報収集と指示を行った。

2 被害の状況

(1) 地震による被害

校舎は耐震補強によりほとんどなかった。

(2) 津波による被害

川口町、幸町、魚町など海岸部は全滅した。校舎は高台にあり被害なし。生徒の家は125名が流失、全壊。1年生男子生徒1名が帰宅後に津波で死亡。震災孤児3名、震災遺児5名。職員の家

は7名が流失、全壊、一部損壊。家族に被害はなかった。

(3) 生徒の安否の確認

3月12日から男子職員3名ずつで安否捜索隊を2班作り、徒歩、自転車で避難所やがれきの中を生徒の家を訪ね探した。13日不明者10名。16日不明者1名。22日不明者1名の死亡確認。

(4) 避難所

10月2日まで提供体育館、教室14、特別教室4、保健室を提供した。

(5) 校庭

仮設住宅84戸、集会所が設置された。校庭の半分も駐車場となり今後も2年間以上は使用を望めない。

3 学校再開に向けて

3月11日、体育館避難所で避難者800名ほどが寒い中で一夜を明かした。

3月12日、学校に泊まっている生徒で気中ボランティアを組織し、プールの水をバケツに汲んでトイレに置いた。掃き掃除や挨拶運動を



一夜明けた体育館

展開し、避難所で生活しなければならなくなった人たちに、協力して暮らすことを生徒の姿で示した。

避難所となった各教室の班長を決めてもらい、打ち合わせに毎日参加し、居心地よく大切に学校施設を使ってもらうための協力を呼びかけた。卒業式は3月22日、修了式は3月24日に避難所にしないで残しておいた多目的教室で実施した。

3月29日から、家をなくし勉強もできずにいる生徒のため、自主学习室を午前中だけ開いた。連日80名以上の利用があった。倉庫となっていた西校舎教室を職員で整備し、8教室を確保した。

市教委から始業式4月21日、入学式4月22日との指示があったが、生徒指導上も含めできるだけ早く学校を再開したく、4月14日から補充学習を開始した。昼食を作れない家庭が多く、午前3校時限とし、前年度未履修の内容と復習を行った。

4 現状と課題及び校長としての決意

停電、断水、電話の不通とライフラインが全て遮断され、3月の寒さとの戦いの中で、生徒、職員の安全の確保、避難所の設営と運営が校長一人の手に全て委ねられたとき、もっとも必要だったのは、判断するための情報だった。

地震による校舎からの退避、体育館に避難者を入れる判断、余震の続く中で寒さから生徒を守るため校舎へ入れるタイミング、迎えに来た保護者に生徒を渡す判断、どの教室から避難所とするか、土足を可とするか、備蓄庫から避難者への物資の提供、水とトイレの確保、生徒の安否の確認、職員の家族の安否の確認、ピース・ウィンズ・ジャパンなどの支援団体の受け入れなど、教育委員会からの指示が全くないまま、校長が即決しなければならぬ場面が相次いだ。

校長室に校内の災害対策本部を置き、2時間ごとに集まり、職員からの情報をもとに判断し、指示した。震災直後は関係機関との連絡はほ



校内災害対策本部

んど取れないので、普段から想定し備えておかなければならないことを強く感じた。

そのような中で、最も力になったのは地区校長会、市立学校長会、管内校長会の存在だった。3月17日ようやく気仙沼地区校長会を校長室で開くことができた。無事を喜び合い、被害状況の確認、卒業式、修了式、入学式について話し合った。ようやく他の学校の状況と校長の対応の様子がわかり一人ではないことの心強さを感じた。3月28日には管内の小中学校長に津谷中学校に集まってもらった。42名中19名が参加した。被害状況を報告し合い、今後の対応について話し合った。参加できない校長へは各地区毎に伝えた。被害の状況

を一覧表にまとめて後で配布した。それぞれ孤軍奮闘していることがわかり、みんなで励まし合った。今後の学校運営についても話し合った。校長会の絆の強さがわかりとても勇気をもらった。

現在、避難所は解除され生徒は新校舎で学習している。しかし、校庭は仮設住宅と駐車場になっており全く使用できない。体育や部活動は隣の気仙沼小学校の校庭を借用している。校庭は気仙沼小学校に同居している南気仙沼小学校も使用しており、今後も自由に使える状況ではない。授業日数については、夏休みの前後8日間を授業日としたので確保できており、授業の遅れはな



校庭の半分が仮設住宅

い。仮設住宅が3年以上続く可能性があり、全く校庭を使用できずに卒業する生徒が出てくる。多感な時期の生徒の心にどう影響するか心配である。

気仙沼の産業の復興は遅々として進まず、時間の経過とともに経済的に苦境に追い込まれる家庭が多くなると予想できる。家や職場をなくし、仮設住宅やアパートで暮らす半数以上の生徒の心にも大きな影響を及ぼすことは間違いない。その生徒の心のケアをどう図っていくかが大きな課題である。

今回の震災で日本だけでなく世界の人々からも多大な支援を受けた。生徒には感謝を忘れないこと、今できることは勉強しかない、それが支援をしてくれた人々たちの期待に応えることであり、一生懸命勉強していつか少しでも恩返しできるような大人になろうと指導している。震災を受け止め、前に進もうと呼びかけている。全職員一丸となり、大震災をバネに志をもって強く生き抜いていく生徒を育てていきたい。



南気仙沼駅前、今は何も無い